執筆者紹介・彙報・編集後記・投稿規程・奥付

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00065959

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ブラジル日系俳人増田恆河の連句活動の意義

白石　佳和

1　問題の所在

ブラジル移民の俳人増田恆河（1911～2008、1929年12月渡伯）は、1984年にブラジル連句研究会を創立し、晩年近くまで連句活動を行った。また、1993年からはポルトガル語による連句活動も行った。指導者がいないブラジルにおいて独学で連句を学び、百巻以上の作品を残している。俳人であった彼はなぜ俳句だけでなく連句活動を、しかも日本語とポルトガル語で行ったのだろうか。

恆河は1935年、24才のときホトトギス系俳人佐藤念腹に師事し、戦後、念腹主宰の俳句雑誌『木蔭』創刊に参加した。さらに、1987年には、ポルトガル語によるブラジルハイカイのグループ「グレミオ・ハイカイ・イペー」の創立に関わった。恆河はそのグループで、虚子の俳句理念である花鳥諷詠、つまり季語を重視する伝統を仲介する役割（白石2021a）を果たした。彼の俳句活動の方も日本語とポルトガル語に跨っている。これまで彼の日系俳句・ブラジルハイカイと連句の関連については先行研究でもほとんど触れられておらず[1]、明らかになっていない。しかし、俳句も連句も中世の連歌・俳諧の系譜に連なる詩型であり、無関係ではありえない。恆河の日系俳句からブラジルハイカイにわたる活動と連句活動には、どのような関わりがあるのだろうか。

本論文では、増田恆河の連句活動の意義とは何か、を考察する。日系ブラジル文学の研究をリードする細川周平は、「文学する」というキーワードを用いて日系文学の活動面に注目する。また日系アメリカ文学の研究者水野真理子も、日系文学の研究では作品だけでなく文芸活動も含めて研究対象とすることを提案している（細川2012:pp.1-35, 水野2012 :p.10）。それらを受けて筆者は、海外における日本語文学に「座の文学」の系譜が見られ、座の文学のプロトタイプは連句であることを指摘した（白石2021b）。増田恆河の連句活動も、「座の文学」の系譜に連なるのではないかと思われる。連句は近代で正岡子規に「連俳（＝連句）は文学に非ず」（『芭蕉雑談』1983）と否定されたにもかかわらず、ブラジルの日系文学で連句活動が復活している点は大変興味深い。本稿では「座の文学」という視点から連句活動の意義について考察したい。

日本の俳句雑誌『雪』のバックナンバーの関連記事と『ブラジル連句の歩み』（増田1997）を中心とした資料に拠りながら、日本語による連句活動とポルトガル語による連句活動、それぞれの歴史や概要を整理する。さらに、実作例も挙げながら、連句活動そのものの意義だけでなく、ブラジル国際ハイクあるいは世界のハイク・連句全体の中での連句活動の位置づけを検討する。

執筆者紹介

猪瀬　千尋　金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系准教授
中野　顕正　弘前大学人文社会科学部助教
畑中　榮　金沢高等学校講師・石川県漢詩連盟理事
孫　媛媛　大学院第4回修了
日比　嘉高　金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程
村戸　弥生　名古屋大学大学院人文学研究科 教授・第43回卒業
白石　佳和　石川工業高等専門学校・金沢美術工芸大学非常勤講師　第32回卒業・大学院第4回修了・社会環境科学研究科第2回修了
高岡法科大学法学部准教授
金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程

彙報

会員著作紹介

※著作の刊行がございましたら、ご一報ください。

猪瀬千尋『中世王権の音楽と儀礼』
（二〇一八年二月刊、四三八頁、笠間書院、八五〇〇円＋税）

二〇二〇年一〇月に本学に着任された猪瀬千尋氏の『中世王権の音楽と儀礼』は、二〇一三年に名古屋大学へ提出した博士学位論文を元に多くの新稿を加えて成る大著である。刊行後すぐに大きな話題となり、「第四回中村元東方学術奨励賞」「第一回説話文学会賞」「第十二回日本古典文学学術賞」受賞という高い評価を獲得した。

本書は、日本史学の王権論を理論的背景として、中世王権において音楽が果たした役割について考察している。これによって、中世における「音楽」を単なる遊芸ではなく、有職故実等に裏打ちされた、高度な政治性・権力性を有するものとして捉え直した点において画期的な著書である。

具体的な内容については、「序章」にある以下の記述によって著者ご自身より明瞭に語られている。すなわち、

本書は〔中略〕音楽が持つ特質を、権力性・身体性・宗教性

の三点ととらえ、三つの特質が事象としてあらわれる場である儀礼を分析の中心とする。その考察にあたっては、注釈と書誌学的分析にもとづいて、時代のものの見方に即した「読み」を提示する。これは日本文学研究において一般的な手法であるが、考察対象として従来の文学作品の枠にとどまらず、仮名日記や漢文日記、故実書や唱導、図像や楽器についても視野におく。綺麗と儀礼を形づくる諸資料の分析を通して、文学―歴史―思想が連関する、音楽の文化的動態を解明することが本書の目的である。

と。

これは旧来の「文学」に止まらない著者の関心と博識を物語るものであろう。この大変困難なテーマに取り組み、大きな成功を収めた本書が前述したように高く評価されたことは当然といえる。私個人としてはかつて学部生時代に受講した棚橋光男先生のご著書が引用されていることも嬉しく、その授業内容なども思い起こされて、じっくり読み耽ることができた。なお金沢大学中央図書館における配架番号は768/158。すなわち音楽書として分類されている。日本古典文学のみならず、中世を中心とした日本史学、そして音楽学に対しても大きな貢献を果たしつつある著書と推察する次第である。

（杉山欣也）

原佑介著『禁じられた郷愁　小林勝の戦後文学と朝鮮』
（二〇一九年三月刊、四〇一頁、二五〇〇円＋税）

小林勝は一九二七年、日帝統治下の朝鮮で生まれ、埼玉の陸軍予科士官学校に入学する十六歳まで、「故郷」朝鮮で育った。敗戦を機に新日本建設を志し共産党入党、一九五二年の朝鮮戦争反対火炎瓶闘争に参加する。それは小林にとって「故郷」朝鮮を戦火から救い、朝鮮の同志と連帯して帝国主義を打倒する闘いであるはずだった。だが、逮捕され未決囚として過ごした拘置所で、死地たる韓国へ送還されていく朝鮮の「同志」をただ見送るしかなかった時、戦後もなお朝鮮を蹂躙し続ける日本の側に自分が立っていること、そして「故郷」朝鮮とは、暴力と差別で朝鮮を屈辱の淵に沈めた日本帝国主義の産物以外の何ものでもなかったことに、小林は目覚める。故郷を「故郷」と呼ぶことが罪であるという、己の存在を根底から否定される苦悩を直視するところから、小林の文学は始まった。

以上の認識に基づき、本書は小林勝の文学と生涯をたどる。拘留中に執筆した「ある朝鮮人の話」（一九五二）で作家デビュー、朝鮮の人と風土への愛を綴った「鮎」（一九五六）、植民者の子としての罪悪感を描く「フォード・一九二七年」（同）など抒情豊かな作品群によって、小林は五〇年代の文壇に新風を吹き込む。だが、裁判結審による再収監、下獄後の離党と肺結核の手術を経た六〇年代に入ると作風は深刻化、「目なし頭」（一九六七）や「蹄の割れたもの」（一九六九）、「万歳・明治五十二年」（同）などで朝鮮と日本との断絶が苛烈に追求され、小林の心身は激しい消耗を強いられる。その

様はまことに痛ましい。しかし、己を切り裂くような「断絶」の追求こそ、真の和解に到る方法であり、朝鮮に対する小林の深い愛の発現なのであった。「懐かしいと言ってはならぬ」と断言して四十三年の生涯を駆け抜けた小林勝に、誇り高き日本人の姿が浮かび上がる。

過去に背を向けるのは論外だが、ただ涙でひれ伏して許しを請うのでも、自分を棚に上げて日本叩きに走るのでもなく、旧宗主国としての歴史の清算という困難に正面から向き合うべしと、筆者・原佑介氏は言い切る。原先生の金大着任は、金大ＯＢで韓国民主化運動支援に尽力した故・安江良介元岩波書店社長の再来を思わせる。そのような原先生と小林勝とが共鳴した力作が本書である。明日への指針を明確に示す、新しい本格派の出現を喜びたい。（團野光晴）

日比嘉高著『プライヴァシーの誕生　モデル小説のトラブル史』
（二〇二〇年八月刊、三〇八頁、新曜社、二九〇〇円＋税）

近代以降、小説は様々な「モデル問題」を引き起こしてきた。自然主義の勃興により、小説の内容と事実を同定していく読書慣習ができあがり、これが「モデル小説」に深く影響することとなる。また、通俗文化のゴシップや実話への関心、人々の〈のぞき見〉への欲望に呼応する形で、通俗向けの諸メディアが部数を稼ぐために〈私的領域〉―プライヴァシーという概念が導入される以前の、〈私に属するものと人々が考える範囲〉―を商品化していくこととなった。「モデル小説」は、登場人物のモデルとなった人物の〈私的領域〉を侵犯することとなるわけだが、この〈私的領域〉をめぐる社会の心性は時代と共に変化している。「モデル問題」が論議を引き起こした場合、創作者の道徳性の問題のみに収斂し、モデルとされた者の苦しみには論及されなかった時代は過ぎ去り、個人情報への意識の変化からモデル側を支援する社会へと移り変わってきたのである。

本書は明治以降、約一二〇年のモデル小説の歴史を、「モデル問題」を引き起こした諸作品を通覧し、また小説と隣接する同時代の言説や出版資本、読者との関係などといった周辺的な問題と共に検討することで、上記のような文学と社会の関係、社会の変化を論じている。本書が主として扱う作品は以下の通りである。

内田魯庵「破垣」（モデル問題がある程度の規模で社会に共有されたはじめての小説）／島崎藤村の諸作品（数々のモデル問題を引き起こした）／芥川龍之介「あの頃の自分の事」・菊池寛「無名作家の日記」（文壇交友録）／久米正雄「破船」ほか〈失恋もの〉諸作・松岡譲「憂鬱な愛人」（〈破船事件〉をめぐる作品）／「傷つける人魚」「青春涙多し」（大衆誌『講談倶楽部』に掲載されたスポーツ選手のモデル小説）／三島由紀夫「宴のあと」・高橋治「名もなき道を」・柳美里「石に泳ぐ魚」（文学と裁判をめぐる問題）

さらに小説をめぐる新たな事態として、万が一のトラブルに備えて、虚構性の高い小説においてすら巻末に参考文献が付される状況の到来が指摘されている。個人情報保護や被害者感情尊重の風潮、

著作物への帰属意識の過剰な高まりが、モデル小説を許容する社会的雰囲気を低下させている現代、「モデル小説」を発表することへの困難性を述べることで、日比氏は本書を締めくくる。

本書の中で特に興味深かったのは、読者の読書慣習に関する観点が導入され、論じられていた点、それから、〈小説をめぐる新たな事態〉（「表現する者」に対する強いプレッシャーによって引き起こされた事態といえる）について指摘している点である。我々を取り巻く社会や「表現」の在り方は変化している。本書の中で、作家同士が相互に監視・暴露しあう状況が成立することへの危機意識を示した後藤宙外の批評が紹介されていたが、SNSが普及した現代においては、文壇のような限られた空間内にとどまらず、誰もが監視や暴露の対象となる危険性がある。本書における「モデル小説」の問題と重なるような事態が簡単に起こり得る時代を迎えているのではないだろうか。そのような時代の中で、改めて「表現すること」と向き合うべきであるという問題意識を抱かせてくれる。本書はそのような一冊であった。

（関戸菜々子）

栗原敦著『宮沢賢治探究　上　思想と信仰』

（二〇二一年七月刊、四七八頁、蒼丘書林、三五〇〇円＋税）

本書は旧著『宮沢賢治　透明な軌道の上から』新宿書房（一九九二）刊行の後、『新校本宮澤賢治全集』筑摩書房（一九九六～二〇〇九）の編纂に携わりながら積み重ねてきた論考をまとめたものである。

「Ⅰ　思想と信仰」「Ⅱ　書簡と事蹟」「Ⅲ　資料と研究・ところどころ上」「Ⅳ　拾遺　初期論考」の四章で構成され、研究者向けに書かれているが、【作品の魅惑・抄】では、一般の賢治文学愛好者にも目配りされている。

著者は作品の解釈だけでなく背景となる伝記的事実にも実証的な調査と考察を続けている。一部の研究者が事実を誤認して（新発見の事実と喧伝して）、マスメディアと結びついて、世間に誤った情報が流布していることに憂慮している（警鐘を鳴らしている）。たとえば妹トシとの近親恋愛的感情、親友保坂嘉内との同性愛的感情、大畠ヤスとの悲恋などの説は、刺激的ではあるが、事実や作品解釈の歪曲があるとして、研究者としての姿勢（態度）に反省を促す。

「Ⅰ　思想と信仰」では、まず宮沢賢治「疾中詩編」に着目し、賢治は死の予感と揺らぎのなかで、己の境涯を振返って我とは何かを問い、本源の法として妙法蓮華経に帰依すると述べる。文学的表現行為（この世に生きる存在への問いと宗教的な信仰との間に架けられたせめぎ合い）に支えられているのではないかと説く。『春と修羅』では、智慧と回心による至福への志向が暗示され、最後の病床の「文語詩稿」では、自己過信を戒め、命がけの詩作によって新生に向かうと説く。

二〇世紀に新しい概念が求められている状況の下で、賢治もまたアイデンティティの危機を他者との共生、宇宙との一体によって克服しようとすると述べる。祖父喜助の「家」概念に進路の閉塞感を覚える賢治に、自らも「個人」として新仏教を模索する（金沢大学暁烏文庫に暁烏敏宛の書簡のある）父政次郎は理解を示して援ける。

賢治は同様の宗教的環境の下でアイデンティティを模索する親友の保坂嘉内に共感する。関東大震災後の東北農村の深刻な状況の下で、賢治が理念の実践として農民生活に踏み出し、農民芸術として羅須地人協会活動を始めると述べる。

草野心平、高村光太郎、石牟礼道子との共感的な交流を語る。

創作メルヘン、ファンタジー萌芽、近代ファンタジー先駆が賢治の童話作品の生成過程に対応していると語る。

童話「黄色いトマト」で幼い兄妹のイノセント（無知、無垢）が貨幣経済の現実に敗れる悲傷が示されるが、後者も歪められた共同幻想ではないかと語る。

宮沢賢治と夏目漱石が新仏教・化学・心理学の影響、大患体験などで響き合うと語る。

宗教的環境（浄土真宗改革運動、禅、唯識仏教、キリスト教の影響）のもとでの法華信仰を核としつつも生の「ゆるぎ」（禁欲への反省）を包括する「動脈硬化的」でない賢治の信仰の確立を語る。

宮沢賢治の生涯を粗描し、賢治の創作と信仰、賢治評価の諸相について述べる。

「Ⅱ　書簡と事蹟」「Ⅲ　資料と研究・ところどころ上」では、賢治の年譜と伝記的資料に対する実証的態度を示す。保阪嘉内宛書簡の時期、伊藤与蔵宛書簡の趣旨、「雨ニモマケズ」詩碑の表記（「ヒデリ」か「ヒドリ」か）、恋人大畠ヤス説の根拠などについて、批正する。

「Ⅳ　拾遺　初期論考」では、まず実践的理念としての究極の共同体への志向（愛著からの遠離）を説く。「農民芸術概論」には、小さな自我を否定し宇宙意志による全生物（自然の地と人）の至福を目指す求道（菩薩道）が示されると説く。

西田幾多郎『善の研究』（世界は真実在の表現、意識現象の展開とする）との関連から「心象」の源流を説く。「心象スケッチ」は一念三千（仏教語）の精神活動を主客同一の動的存在として写しとると説く。

【作品の魅惑・抄】では、童話「いてふの実」を例に、死生観と宇宙観に根ざした〈美しいもの〉の探求に言及する。

（河原修一）

栗原敦著『宮沢賢治探究　下　表現の論理』

（二〇二一年八月刊、四六〇頁、蒼丘書林、三五〇〇円＋税）

「Ⅰ　表現の論理」「Ⅱ　資料と研究・ところどころ下」「Ⅲ　拾遺追悼文・論考補遺」の三章で構成され、研究者向けに書かれているが、【作品の魅惑・抄】では一般の賢治文学愛好者にも目配りされている。

「Ⅰ　表現の論理」では、作品は表現過程のすべてであると述べ、様々な可能性の危機に身を投ずる表現行為の意味を探究する。〈下書き草稿・手入れ稿・清書稿・定稿・発表後手入れ稿〉という各段階が表現者の認識過程と対応すると述べる。賢治の手帳・ノートに見られる理念や創作メモに言及する。敗戦後における多様なテキストによる受容として、様々な編者の校訂による全集などの編集出版を概説する

『注文の多い料理店』所収の童話九編のうち〈歌〉（賛歌）の挿入

される五編で、生命の根源との融合体験への夢が示され、〈歌〉のない四編で、都会的価値観に対する批判と世俗的現実の超克として、世界の多元的・重層的な相を超えた究極的一体を観る観点が示されると説く。

少年小説『銀河鉄道の夜』でジョバンニが一般鉄道の八分の五のサイズの軽便鉄道の列車で銀河の旅をする効果と意味を考察する。世界の巧みな縮小は、強化遠近法による客観化と全体像の把握という現実感をもたらす。ジョバンニの疎外感と「銀河のお祭」への参加の欲求とが結びついた想像力は、夢みる銀河鉄道の動力（生命力）として、心臓の鼓動に似た列車の音となる。作品の最終形でジョバンニの生活の現実が付加されることで、夢の世界がジョバンニの実存的な問いと結びつく。ジョバンニの町には近代日本の生活形態が反映されている。〔或る農学生の日誌〕は、現実認識の眼差しを獲得する「写実主義」的な試みを媒介する。また、銀河鉄道の列車には（瞬間的な死ではなく）過程的な死が表象されると説く。

学校演劇、農民劇への抑圧という現実の中の争闘が、戯曲「ポランの広場」から少年小説「ポラーノの広場」への変貌となると述べる。

少年小説「風の又三郎」では、転校生高田三郎の背景にある鉱山開発が子供らには隠されて謎めき、一郎には三郎の利他的な行為が衝撃となり、嘉助には風の又三郎への同化の幻想となると説く。

宮沢賢治と（過激な論で学校を除名される）保坂嘉内の超俗志向的な反撥が短篇梗概「大礼服の例外的効果」に反映し、複数の視点による異なる世界認識の重層化につながると説く。

宮沢賢治の短歌は、その時の気持のスケッチと再度味わう営みとして詩や童話の原型となると述べる。

詩集『春と修羅』のテキストクリティークとして、町の小さな印刷所による初版本の異同の経緯を述べる。

歌・口語・文語の関連では、昭和三年の賢治の東京滞在に着目し、震災後に復興した新東京の旧倫理から解放された享楽傾向と若い女達の口語が大衆歌謡に向かうなかで、賢治が無意識に反応しつつ、詩作に独自の口語と文語を試みると説く。方言や文語を含む短歌・詩、「冬のスケッチ」から「疾中」詩編に至る文語と口語の交錯、短歌・短唱・口語詩から改作する文語詩稿に言及する。文語詩の選択の動機として、構築的描写を超える定型化と典型化の意志があると説く。

詩「永訣の朝」では、利他的な妹が現象に遍在する本質の認識を促すためにあめゆきを頼んだことに気づいた「わたくし」の位置は祈りの場にあると説く。詩「樺太鉄道」に関連して、樺太の地形や（素直で妖精に似た）コロボックルの伝説に言及する。詩〔月の鉛の雲さびに〕「五輪峠」では、文語詩の凝縮した構成に言及する。

「Ⅱ　資料と研究・ところどころ下」では、「銀河鉄道の夜」の背景に天文学の知見（白鳥座の連星、南十字架座のブラックホールなど）があると語る。次妹のシゲや末妹クニの証言に言及する。

「Ⅲ　拾遺　追悼文・論考補遺」では、妹トシの逝去の日の賢治の行動という伝記的事実がむしろ詩「永訣の朝」の作品性を示すと説く。

【作品の魅惑・抄】では、童話「フランドン農学校の豚」「よだかの星」で殺生について問う。

栗原敦先生は一九七七年から一九八一年まで本学教員。（河原修一）

木越治著、木越俊介・丸井貴史編『ひとまずこれにて読み終わり』
（二〇二一年一〇月刊、三三六頁、文化資源社、一二〇〇円＋税）

木越治氏の遺稿集である。ご自身の生い立ちについて、いくつかのエピソードは個人的会話や学生に対する談話を通して耳にする機会がしばしばあったし、また、研究室誌『木馬』でその一端を拝見したこともあった。冒頭の「自分史への試みより」は、いかにも先生らしいタイトルだが、出生から青年期にかけての様々なことが時間の流れに沿って語り綴られている。

この文章を皮切りに、文学のことはもとより、映画のこと、落語のこと、旅での経験、日常生活の事柄と様々な話題に及ぶ、本当に多彩な文章が満載されている。どれを読んでみても、自身が話しているかのような筆致で、近世文学研究者でご子息の木越俊介氏も巻頭「「鶏肋集」のことーご挨拶に代えて」でまさしく述べられるとおり、先生の声が聞こえてくる気がする。文章によって文体が大きく違うのに、どれも肉声そのもので、真の意味ですべてが「物語り」と言ってよいと思う。肉声が聞こえてくるのは、どんな軽い話題の文章であっても、分け隔てなくきちんと魂が入っているからなのだろう。それをぜったい粗忽にされない人柄であった。そう考えたとき、もう一人の編者である、金沢大、上智大と学生として時間をともにされた同じく近世文学研究者の丸井貴史氏による巻末「ひとつのよすがとしてーやや私的な解題ー」の評言、「「書く」ということの一点において、先生にとっては学術論文もエッセイも、何ら区別されるものではなかったのであろう」に思い当たる。

私は、木越治氏がチェコに滞在中、日記のようなメール通信の配信先に加えてもらっていた。当時、毎日のようにそれを読んでいると、私もチェコに居るかのような気にさせられたことを今でも懐かしく思い出す。そのためか、先生が帰って来られた折も久しぶりという気がしなかったほどである。このたびの文章を読んでみてもそうなのだが、さほど景色の描写があるわけでもないのに、氏の文章には映像が自然と浮かぶ不思議な力がある。考えさせられる内容が詰まっているために、かなり強い印象を読み手に残すこととどこかで繋がっているのかもしれない。文庫本という気軽に手にしうる大きさだけに、持ち歩き、ことあるごとに開いて、木越治氏のいろいろな議論に耳を傾けながら、考えをともに深めるよすがとしたい。（高山知明）

勝又基著『親孝行の日本史　道徳と政治の１４００年』
（二〇二一年一一月刊、二三二頁、中公新書、八六〇円＋税）

一般の読者向けの易しい語り口に勝又さんの優しい人柄が感じられて、学部時代にお世話になった（勝又さんは僕の一年先輩）ことを懐かしく思い出しながら読みました。

僕が一番印象に残ったのは、次の一節。

たとえば現在、我々が社会や政治において、疑うべくもない善だと考えているものに「自由」や「平等」が挙げられるかと思います。これらに対する我々の感覚と同じように、江戸時代に生き

る人々は、封建制度を当たり前の良いものだと思っていたのです。そして、その秩序を守ることをこそ善と考えていました。

「封建体制」のような、当時の人にとって常態の制度を現代の視点で過剰に特別視すると、いつまでたっても、進歩した近代の側から遅れていた江戸時代を批判するという構図にとどまってしまうように思えてなりません。なので筆者は、もっと江戸時代の人々の感覚に即した視点で、当時の孝を把握したいと思うのです。（P58「第三章　幕府の政策？　庶民の政策？」の「1　なぜ表彰するのか」より）

上記のことをアドラー流に言うと、「江戸時代の人の目で見て、耳で聞いて、心で感じる」という姿勢で江戸時代の人々の書き残したものを読むということだと思います。

僕はこの部分に、現在の、あるいは自分の常識を疑うべくもないものとして読むという姿勢は、実はかなり傲慢な読み方なのではないかという批判を読みました。古典から何かを学ぶとすれば、古典の世界に自分自身を寄せて学ぼうとする姿勢が大事なのではないか。

また、勝又さんの古典に対する態度は、ある時代の言説を分析して「はい、ここにも政府のイデオロギーを強化するような傾向が見られます」と指摘するような、浅薄なカルチュラル・スタディーズ的研究に対する、痛烈な批判になっているのではないかと思いました。

また、僕は、中学校の教員として、勝又さんの古典に対する態度には、特別支援教育にとって大切な視点があると感じました。

自分の常識を疑うべくもない善だと考えて生徒に接すると、どうしても特別な支援を要する生徒のことを批判的な目で見てしまいがちです。そうではなく、江戸時代の人々の感覚に即した視点で当時の孝を把握するように、生徒の感覚に即した視点で生徒の言動を把握することができれば、生徒のニーズを大切にしたより生徒のためになる教育を行えるのではないか。教室の中の多様性を担保するにも、生徒一人一人の感覚に即した視点を、まずは教師がもたなければならないのではないか。そんなことを考えました。

古典を学ぶ意義は、そういう視点を学べるところにもあるんじゃないかな。

（海見　純）

木越治・丸井貴史編『読まなければなにもはじまらない―いまから古典を〈読む〉ために』

（令和三年（二〇二一）十一月刊、三一九頁、文学通信、一九〇〇円＋税）

本書は、二〇一八年二月に没した本学名誉教授・木越治先生の遺稿を中心として、古典を「読む」とは何か、ということを広く世に問う書物である。

第一部「読まなければなにもはじまらない」はその遺稿である。まず「読む」上で「語り」に注目すべきことを説くが、その説明にあたっては、映画、評論、落語、講談、はては授業でのひとコマなど、いかにも先生らしい多彩な例が挙げられている。です・ます体

の文章も相まって、つい先生の講義を受けているかのような錯覚を催してしまう。その上で、「語り」の歴史を『源氏物語』から御伽草子、そして西鶴『好色五人女』まで解き明かしている。本来ならばこのあと、秋成を始めとして近世小説を通時的に解き明かして行く構想をお持ちだったかと推測するが、病魔によって中絶せざるを得なくなったのは、悔やんでも悔やみきれない。

この遺志を引き受けて、師の求めたる所を求め、一書と成してくれたのが卒業生で門下生の一人・丸井貴史氏（現・就実大学講師）である。第二部「古典を「読む」ためのヒント」、第三部「いま、古典を「読む」ということ」には、丸井氏はもとより本学科卒業生の紅林健志氏、宇治田健志氏をはじめとする気鋭の研究者十二名が、古典文学作品を分析し、教え、広めるための有益な論考を寄せる。第四部「読むことでなにがはじまるのか」と題した気鋭の創作者たちとの座談会は、従来の研究・教育という立場がいかに限られたものかを見せつけるとともに、古典の新たな魅力も示してくれていて、たいへん示唆に富む。

出版をめぐる状況の厳しい令和の世にあって、木越先生を慕っての書物は少なからず刊行されて来た。その中でも、先生の遺志を最もダイレクトに伝えるのは本書である。木越先生の講義をもう一度受けたいと思う方、古典文学の行く末についてより考えを深めたい方に広く勧めたい一冊である。

（勝又　基）

卒業論文・修士論文一覧（二〇二一年提出分）

卒業論文

相田　悠真　坂口安吾〈堕落〉考―「堕落論」「白痴」の考察から
石田　尚己　芥川龍之介の書簡体小説と幻想性
宇根本理玖　Twitterにおける役割語の役割
―「あたい」の使用法から―
大野　慈正　芥川龍之介「河童」における「どうかKappaと発音して下さい。」一考
上梨　美咲　夢野久作「瓶詰地獄」論
―太郎とアヤ子が堕ちた地獄
栗山　直子　『伊勢物語』における二条の后と貧しさ・卑しさを表す言葉について
後藤　裕美　三浦綾子「氷点」「続氷点」論　―陽子が生きる意欲を取り戻した所以―
近藤　由奈　川上弘美「蛇を踏む」論　―蛇／女により露わになった〈違和〉と〈ズレ〉―
斎藤ひとみ　芥川龍之介「偸盗」におけるエゴイズム
地蔵　帆花　太宰治「パンドラの匣」論
高木　大河　開高健「輝ける闇・夏の闇」研究
竹内　裕乃　望まれたトラップ一家像は何か―
『菩提樹』と『サウンド・オブ・ミュージック』の差異から考える
茶谷　美月　樋口一葉「たけくらべ」現代語訳論
―川上未映子訳との文体比較を通して―
中田　息吹　小川未明の童話における月がもたらす作品世界
原田　悠暉　芥川龍之介「素戔嗚尊」における旅の意味
廣瀬莉李花　芥川龍之介「手巾」論
松浦　健寿　太宰治『人間失格』の手記がもたらすもの
松田　梨子　大伴家持の歌に見る「しなざかる越」
簗瀬　実里　芥川龍之介「雛」論　―老女が語る意味とは―

修士論文

畢　晟　島崎藤村の下層民意識　―『旧主人』を中心に―
桂　媛媛　稲垣足穂とアヴァンギャルド―「一千一秒物語」を中心として―
蘇　婧欣　倉石武四郎における中国古典文学の解読―「文学の大衆化」の観点を中心に―
張　旭　占領文学における身体表象：田村泰次郎「肉体の門」と三島由紀夫「鍵のかかる部屋」を中心に
趙　玥　三島由紀夫「女神」論―作品の成立と改稿について―
森田　桃花　梶井基次郎論―『橡の花』と『Kの昇天』に二つの書簡体小説からみる、梶井の《分身》構想の軌跡―

編集後記

○前号の薄さに危機感を抱いた（?）皆様のご協力により、本号では六本の論考を掲載することができました。コロナ禍も二年目となり、様々な点で新しい研究様式に慣れてきた証しとも考えられます。また今回は、新着任の先生方のご著書や、旧教員である栗原先生のご著書、木越先生のご遺著、そして卒業生による著書の刊行から新刊紹介が多くなり、彙報欄も充実した内容になりました。編集担当としてほっとしているところです。

○近年、インターネットによる研究情報の公開が進んでいます。たとえば国会図書館では著作権の保護期間が満了した図書資料・古典籍資料全部（約三三六〇〇〇点）の検索が可能となる「次世代デジタルライブラリー」を始めました。『金沢大学国語国文』掲載の論文も金沢大学附属図書館のリポジトリを通じてCiniなどの研究情報検索でヒットし、本文もダウンロードして読むことができます。これらの報に接するたび、かつてとは比較にならないほど研究の窓が開かれていることを実感します。

○やはり最近では「在野研究」という言葉を目にすることがあります。研究職に就かずとも、熱意があれば休みの日を活用して研究の継続は可能だということです。その背景には、右に記したようなインターネットによる研究環境の充実があります。大学や大学院で取り組んだ自身の課題を継続して考える環境は、以前より格段に整っています。そしてご自身の見解がまとまったところで、その成果を発信する媒体として『金沢大学国語国文』を選んでいただければ幸いです。

○「宛先不明」の印が押されて返送される茶封筒を見るたびに寂しい思いをしておりますが、まだまだ活用価値のある媒体として本誌を再認識していただければうれしく思います。（杉山欣也）

『金沢大学国語国文』投稿規程

○金沢大学国語国文学会の会員は誰でも機関誌『金沢大学国語国文』に投稿することができます。
○日本文学・日本語学に関する研究であれば、時代・分野を問いません。
○枚数は四百字詰め原稿用紙換算四十枚以内とします。ただし、特別号については、別に定める場合があります。
○投稿原稿の採否は編集委員会で決定します。
○編集委員は、毎年第一回目の理事会で選出いたします。
○投稿論文の送り先は左記宛にお願いします。

〒920―1192
金沢市角間町　金沢大学人間社会二号館
日本語学日本文学研究室内
金沢大学国語国文学会事務局

金沢大学国語国文学会会則

第一条　本会は、金沢大学国語国文学会と称する。

第二条　本会は、会員相互の国語国文学に関する研究の促進と連絡をはかることを目的とする。

第三条　本会は、前条の目的を達するために左の事業を行う。
一、研究発表会・講演会の開催
二、機関誌の発行
三、その他必要と認められるもの

第四条　一、本会の会員は、金沢大学文学部日本語学日本文学専攻・国語国文学専攻および金沢大学法文学部国語国文学専攻ならびに金沢大学大学院人間社会環境研究科（日本語学日本文学関係）および文学研究科文学専攻（日本語学日本文学）・国文学専攻の卒業生・修了生、教員、またはこれに準ずるものとする。
二、元教員・元教官は特別会員とする。

第五条　本会には左の役員を置く。
理　事　若干名
代表理事　一名
会　計　一名
会計監査　一名

第六条　一、理事は会員の互選による。但し教官は理事とする。
二、代表理事および会計・会計監査は理事の互選による。
三、役員の任期は一年とする。但し再任は妨げない。

第七条　理事会は本会運営の責にあたる。但し必要に応じて編集委員会等の専門委員を選出任命することができる。

第八条　会務を遂行するため、事務局を金沢大学文学部日本語学日本文学研究室に置く。

第九条　本会の経費は、会費その他をもってあてる。

第十条　会員は機関誌・会員名簿の配布を受ける。会員は機関誌・研究発表会において研究を発表することができる。

第十一条　会則の変更その他重要事項の決定は、総会の議を経なければならない。
総会は、年一回これを開く。

付　則

第一条　会費は年額二、〇〇〇円とする。

第二条　本改正会則は平成十二年四月一日から施行する。

金沢大学国語国文　第四十七号
令和四年三月二十二日　印刷
令和四年三月二十二日　発行
編　集　金沢大学国語国文学会
発　行　金沢市角間町
金沢大学人間社会一号館
金沢大学国語国文学会
印　刷　金沢市御影町十九―一
ヨシダ印刷株式会社